様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３３９２

研究課題名（和文）帝政前期ローマにおける政権交代と過去の記憶

研究課題名（英文）Imperial succession crisis and its memory under the early Roman Empire

研究代表者
福山　佑子（Fukuyama, Yuko）

早稲田大学・国際学術院・准教授

研究者番号：４０６３３４２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、帝政前期ローマで繰り返された皇帝位をめぐる内乱や政権交代という「危機」が、いかに後代の皇帝にとって都合の良い形で歴史に織り込まれていったのかという問題を分析することで、古代ローマにおける過去の歴史認識や集合的記憶の改変過程の可視化を目的とするものであった。この恣意的な集合的記憶の構築過程の解明という課題に取り組むために、碑文史料に残された「危機」の時代の記録と元老院議員などの人物が少し後の時代に記した歴史書における「危機」についての叙述の比較を行ない、「危機」に対する認識の定型化とその変容、また意図的な「危機」像の構築がいかに行われたのかを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現代の社会においても、戦争や内乱だけでなく、経済問題や社会問題も含め様々な「危機」が存在している。このような「危機」は後にどのように記憶され、歴史の一部となっていったのだろうか。この疑問を検討する一例として、本研究は古代ローマの皇帝に関連する混乱についての記憶が同時代の碑文史料や少し後に書かれた歴史書でどのように描写され、「歴史化」されているかを検討することから、過去についての集合的記憶が形成される過程を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to analyze how the "crisis" in the early Roman Empire, that is, the imperial succession crisis and the civil war, were described in historical narratives and how these events became a part of ancient Romans' collective memory. The analysis and comparison of contemporary epigraphical documents and the historical narratives (Suetonius, Tacitus, Cassius Dio, and Herodian) allowed to find the creation of the regular pattern for the recognition of "crisis" and its implantation in historical narratives, and also the transformation of the image of "crisis" for Romans in the late second century and the early third century. This result led to the reexamination of the social, religious, and political changes which happened during this period and of the image of the "crisis" in the Roman Empire.

研究分野：古代ローマ史

キーワード：古代ローマ　皇帝　記憶　歴史叙述

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

政権交代やクーデターのような「危機」は、後の政治体制の意向によって扱われ方が変容しやすい題材であり、歴史におけるこれらの「危機」の語られ方は、国家の集合的記憶の形成とも密接に結びついている。このような「危機」は古代ローマにおいても度々生じており、帝国の最盛期とも評される帝政前期においても、皇帝の殺害などにより権力の空白が生じた際に皇帝位を得ようとする人々が争う内乱が繰り返されていた。例えば、ネロの自殺後に生じた 69 年の内乱やコンモドゥス暗殺後の 193 年には複数の皇帝がたて続けに即位しては廃位されている。このように度重なる政治上の危機に見舞われつつも、ローマは帝国として安定した政体を保ち、地中海世界における覇権を維持し続けていたとされる。ただし、国家の歴史を叙述する際、過去の皇帝の暗殺や悪評、また皇帝位をめぐる内乱は、乗り越えた「危機」として組み込まざるを得ない要素であり、その扱い方からは後に権力を獲得した人々の思惑を読み取ることができる。また、このように過去の出来事を歴史の中でどのように認識するかという問題は、西洋古代史に限らず広く関心を集めているテーマでもある。

ネロ、ドミティアヌス、コンモドゥスなど、これまで国家に「危機」をもたらしたローマの「悪帝」については、彼らを再評価する研究が近年盛んに行われている[1]。また 2000 年以降には、「悪帝」の記録の破壊（ダムナティオ・メモリアエ：記憶の断罪）の研究が多数行われており[2]、これまで応募者も記録の破壊の変容から皇帝と元老院の位置付けを再検討する研究を行ってきた。しかし、なぜ彼らの「悪帝」イメージの形成過程を取り上げた研究は多数存在するものの、彼らの評価がローマの歴史にいかに織り込まれていったのかという、過去に対する認識の変容を取り上げた研究は行われていない。そこで本研究では、突発的な政権交代などの「危機」の実態と歴史叙述における差異の分析から、国家が乗り越えた「危機」という集合的記憶の形成過程と歴史認識の変容を検討したいと思うに至った。

２．研究の目的

本研究は、帝政前期において生じた内乱を伴う政権交代という「危機」が、いかに古代ローマの「歴史」の中に織り込まれていったのかという問題の解明を目的とする。

ネロのように後世において「悪帝」と評される皇帝たちは、彼らが国家に「危機」をもたらしたがゆえに死去することとなり、縁戚関係にない人物が国家に平和と自由を取り戻すために新皇帝に就任したというレトリックを用いて同時代の歴史書などの言論空間で語られている。とはいえ、タキトゥスやカッシウス・ディオなど皇帝と対立する立場にもあった元老院議員の手による歴史書や、元老院寄りの作品が多いという叙述史料の制約もあり、これらの「危機」の克服と自由の復活という歴史認識は、必ずしも同時代や執筆時期の認識を反映しているわけではない。

実際、元老院によって「悪帝」として断罪され、時には元老院決議によって破壊が命じられたはずの皇帝たちに関する記録の残存状況は事例、時代、地域によって大きく異なる。それゆえ、碑文を中心とする「悪帝」が生前に残した記録からは、言論空間の記録とは異なる「悪帝」の位置付けを読み取ることが可能である。

また、「悪帝」に対する評価は古代においても必ずしも一定していたわけではなく、時代によって変化している事例も見受けられる。例えば、コンモドゥスのように一度は元老院によって断罪されたものの、後の皇帝によって名誉回復のみならず、神格化まで行われた皇帝すら存在する。

それゆえ本研究は、公共空間で「悪帝」が生前に示した記録の残存状況と、歴史叙述における関連記述を比較することで、「危機」の歴史叙述の形成過程を検討した。またこの課題は、ローマ世界における過去に対する認識の変化、歴史が持つ社会的な意味の変容にもつながるものである。

３．研究の方法

本研究では、まず碑文史料の分析から「危機」の時代を生きた皇帝たちの記録の残存状況の包括的な把握を行った。主にラテン碑文集成、ラテン碑文データベース（EAGLE https://www.eagle-network.eu/resources/search-inscriptions/）、ギリシア碑文データベース（PHI https://inscriptions.packhum.org/）などを用いて関連する碑文を渉猟し、碑文の破壊の有無、名前の削除の有無、設置場所、碑文の出土状況のコンテクストを個別に確認した。国家に「危機」

---

[1] M. A. Tomei and R. Rea (eds.), *Nerone*, Roma, 2011; Brian W. Jones, *The Emperor Domitian*, London/New York, 1992; O. Hekster, *Commodus: an emperor at the crossroads*, Amsterdam, 2002.

[2] H. Flower, *The Art of Forgetting: disgrace & oblivion in roman political culture*, North Carolina, 2006.

をもたらした皇帝は死後に記憶に対する攻撃が行われており、元老院の指示だけでなく、新皇帝の意向に沿おうとする各都市の思惑もあり、記録の意図的な破壊が行われた事例が多数存在する。その一方で、皇帝や地域によっては碑文等の記録が無傷で公共空間に掲示され続けた事例も確認できた。

この作業とあわせて、叙述史料における「危機」の時代の評価についての分析も行った。具体的には、タキトゥス、スエトニウス、プルタルコス、カッシウス・ディオ、ヘロディアノスによる歴史書や伝記における「危機」の叙述を渉猟し、碑文などの公共空間に掲示された記録において示される「危機」の時代の皇帝評価と、叙述史料の記述が示そうとしている「危機」のイメージとの相違点の分析を行った。

４．研究成果

本研究の最大の成果としては、『ダムナティオ・メモリアエ：作り変えられたローマ皇帝の記憶』岩波書店、2020 年の刊行があげられる。本書は、表向きは元老院が行った決議によって行われることがあったメモリアへの攻撃について、碑文史料と叙述史料の比較を行いながら、皇帝と元老院がどのような関係にあり、その関係がいかに変化したのかについて分析したものである。カリグラからセウェルス・アレクサンデルまでの皇帝たちのうち、死後に元老院によって「悪帝」とされた皇帝のメモリアが、どのような理由付けで、どのように攻撃されたのかを事例ごとに検討したうえで、これらの皇帝たちは碑文や彫像が破壊され、時にはその痕跡が公の場に掲示され続けることによって、歴史書などを読まない人々にも「悪帝」として断罪された記憶が示されていたことを示した。その一方で、この集合的記憶を作るための媒体としての彫像、碑文、モニュメント、建築物などの重要性は、2 世紀末頃から低下しつつあったことも指摘し、この記念物に対する認識の変化は、集合的記憶を構築する方法に変化が生じたことの現れであると結論づけた。

また、2019 年に刊行された「コンモドゥスの記録と記憶：碑文に刻まれた 2 世紀末の皇帝・元老院関係」『歴史学研究』984、48-56 頁では、コンモドゥスの死後に生じた帝位継承をめぐる混乱を皇帝の記録を軸として分析することで、元老院の決定を皇帝が覆し、新たな記憶を構築する過程とその影響を明らかにしている。

碑文と叙述史料を分析する本研究の手法を応用することは、4 本の論文の刊行につながった。2019 年の「近代イタリアにおけるアウグストゥス：アウグストゥス霊廟とローマ皇帝の記憶『史潮』85、21-45 頁は、アウグストゥスにまつわる集合的記憶の形成が近代のイタリアにおいていかに政治利用されたのかという問題を、アウグストゥス霊廟であった遺構の活用と復元から論じた。2022 年の「アインジーデルン碑文集成と中世における古代ローマ碑文の記憶」周藤芳幸（編）『古代地中海世界と文化的記憶』山川出版社、418-444 頁は、本研究で検討対象とした現存しない碑文の記録が残されている、中世に作成された古代ローマ碑文カタログの検討から、都市ローマを訪れた／訪れたいと思う中世の人々が、古代ローマのいかなる点に関心を持っていたのかを明らかにした。これは同時に、中世における古代ローマにかかわる集合的記憶の構築にかかわるものである。2023 年の『15−16 世紀イタリアにおけるウェスウィウス山噴火の記憶：ジョルジョ・メルラと古代への関心」『早稲田大学図書館紀要』70、34−53 頁は、本研究で検討対象としたカッシウス・ディオのギリシア語テクストが、15 世紀にイタリアでラテン語に翻訳された後にどのような影響を与えたのかを論じたものである。同年には碑文研究にデジタル・ヒューマニティーズの研究手法を取り入れることの可能性を提示する共同研究の成果として、“Unearthing Emotions: Analyzing Ancient Roman Inscriptions with NLP,” *Lightning Proceedings of NLP4DH and IWCLUL 2023*, pp. 18-22 も刊行した。

本研究では、帝政前期ローマで繰り返された政権交代という「危機」が、いかに歴史に織り込まれていったのかという問題の分析を通じて、古代ローマにおける過去の歴史認識と集合的記憶の改変過程を明らかにすることを目的としたものであった。研究期間の全体を通じた成果としては、特に単著を中心として、暗殺などによる皇帝の突然の死が主に 2 世紀と 3 世紀の歴史叙述においていかに描写されていたのかに着目し、このような「危機」についての描写が時期や社会背景に応じて変化していたことを述べた。この書籍は当初の研究成果の発表予定に比べて早い時期の刊行となったが、これを基礎として研究をすすめることで、古代ローマにおいてつくられた過去の記憶が 2、3 世紀のローマの歴史叙述だけでなく、より後の時代においてもいかに受容されたのかという問題についても取り組み始めることができたことから、当初の想定以上に研究の広がりを持つことができるものとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 福山佑子	４．巻 70
２．論文標題 15-16世紀イタリアにおけるウェスウィウス山噴火の記憶：ジョルジョ・メルラと古代への関心	５．発行年 2023年
３．雑誌名 早稲田大学図書館紀要	６．最初と最後の頁 34-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福山佑子	４．巻 984
２．論文標題 コンモドゥスの記録と記憶 ： 碑文に刻まれた2世紀末の皇帝・元老院関係	５．発行年 2019年
３．雑誌名 歴史学研究	６．最初と最後の頁 48-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福山佑子	４．巻 85
２．論文標題 近代イタリアにおけるアウグストゥス ： アウグストゥス霊廟とローマ皇帝の記憶	５．発行年 2019年
３．雑誌名 史潮	６．最初と最後の頁 12-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Jun Ogawa, Yuko Fukuyama, Emily Ohman	４．巻 1
２．論文標題 Unearthing Emotions: Analyzing Ancient Roman Inscriptions with NLP	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Lightning Proceedings of NLP4DH and IWCLUL 2023	６．最初と最後の頁 18-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5281/zenodo.10214495	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福山佑子	４．巻 132-5
２．論文標題 回顧と展望：古代ローマ	５．発行年 2023年
３．雑誌名 史学雑誌	６．最初と最後の頁 92-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 福山佑子
２．発表標題 15-16 世紀イタリアにおけるウェスウィウス山噴火の記憶 ：早稲田大学図書館所蔵『ローマ皇帝群像』(1503 年頃)から見るジョルジョ・メルラと古代への関心
３．学会等名 イタリア言語文化研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 福山佑子
２．発表標題 ローマ皇帝の「記憶」の構築
３．学会等名 第71回日本西洋史学会小シンポジウム１「古代地中海世界における知の動態と「文化的記憶」」
４．発表年 2021年

１．発表者名 Jun Ogawa, Yuko Fukuyama, Emily Ohman
２．発表標題 Unearthing Emotions: Analyzing Ancient Roman Inscriptions with NLP
３．学会等名 The Joint 3rd International Conference on Natural Language Processing for Digital Humanities & 8th International Workshop on Computational Linguistics for Uralic Languages NLP4DH & IWCLUL（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

1．著者名 周藤 芳幸	4．発行年 2022年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 464
3．書名 古代地中海世界と文化的記憶	

1．著者名 福山 佑子	4．発行年 2020年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 248
3．書名 ダムナティオ・メモリアエ つくり変えられたローマ皇帝の記憶	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関